第一七回南のシナリオ大賞応募作品

# 家族の絆

登場人物

田口陽子（17）　高校生・洋平の娘
田口洋平（39）　プロ野球選手
田口梨乃（39）　洋平の後妻
田口優香（3）　洋平と梨乃の子供
実況アナウンサー

「家族の絆」のあらすじ

陽子の父親、洋平はプロ野球選手。自宅で試合を観戦中、洋平が頭にデッドボールを受けて担架で運ばれていく。

急遽、陽子は洋平の後妻・梨乃と洋平との間に産まれた優香の３人で、試合をしていた福岡へ向かう。

陽子は、ずっと病死した母親への思いが残っており、梨乃のことが受け入れられない。病室にいる洋平に、梨乃と優香がいない隙にその思いをぶつけるも、洋平は、梨乃と優香を大切にしている。

「自分の母親はひとりだけだ」と叫んだ所で病室に戻ってきた梨乃と優香。

陽子は部屋を飛び出していく。病院近くの公園で、陽子は追いかけてきた梨乃と、お互いの本音をぶつけ合う。最後に優香が現れ、それぞれの思いをもって泣き出す陽子と梨乃の頭を撫でる。

野球の試合中（テレビ）
投手の投げたボールが、田口のかぶっているヘルメットに当たる音。
ファンの悲鳴。

実況アナウンサー「あーっと、頭に当たった。田口。大丈夫か」

まな板を包丁でたたく音。
少女の駆ける足音。

優香「ママ、ママ。パパ、倒れちゃったよ」
梨乃「え？」

まな板を包丁でたたく音が止まる。
また少女の駆ける足音。

優香「お姉ちゃん。パパ、大丈夫？大丈夫？」
陽子（M）「私も、テレビで観ていた。福岡ドームの試合。父親がグラウンドの上で動か

なくなっていた」
優香「ねぇお姉ちゃん。お姉ちゃん」
陽子「うん。大丈夫だよ」
優香「本当？本当に」
陽子（M）「私は、父親も、この子も、大嫌いだった」
梨乃「陽子さん」
陽子「はい」
陽子（M）「でも、この女が一番嫌い」
梨乃「私、福岡に行ってきます」
陽子「わかりました」
梨乃「一緒に、行ってくださいませんか？」
陽子「はい」
優香「優香も行く。優香も行く。パパ死んじゃったんだもん」
梨乃「死んでないでしょ」
優香「死んだもん。死んだから」
陽子（M）「ほんと、みんな死んじゃえばいいんだ。みんな。私も含めて。みんな」

病院の引き戸を開く音。

田口「おぉ。来たか」

梨乃「あなた、大丈夫なの」

田口「あれ？優香は」

梨乃「抱っこしてたら寝ちゃった」

田口「抱かせてくれよ」

梨乃「大丈夫なの？」

田口「大丈夫だって」

梨乃が田口に優香を渡す衣擦れの音。

田口「可愛いな。ほんとに」

梨乃「あなた」

田口「なんだよ」

梨乃「陽子さん」

田口「おぉ。陽子も来てたのか」

陽子「悪い？」

田口「悪くないよ。全然。福岡、美味いもんいっぱいあるぞ」

梨乃「そうね」
陽子「聞いてないし」
田口「いや、ほんとなんだって」
梨乃「大丈夫なの？頭」
田口「大丈夫だよ。検査も受けた。明日は、試合に出るつもりだよ」
梨乃「大丈夫？」
田口「プロが試合に出るのは当たり前だろ」
梨乃「あなたの体のことよ」
田口「大丈夫。任せとけって」
優香「おしっこぉ」
田口「お。起きたか」
優香「ママが良い」
田口「チェッ」
梨乃「ママと行こ。ね」

梨乃、田口から優香を渡される衣擦れの音。

梨乃「何か、買ってくるものない？」

田口「大丈夫だよ」
梨乃「うん。わかった」
優香「ママ。早く早く」

引き戸を開けて出ていく音。

田口「ありがとな」
陽子「母さんなら、あんなこと言わなかった」
田口「何の話だ？」
陽子「母さんなら、無理してでも試合出ろって言ってた」
田口「あぁ…そういうことか」
陽子「父さんは良いね。全部忘れられて」
田口「俺はバカだからな」
陽子「信じられない」
田口「ちゃんと話し合ったじゃないか」
陽子「話し合ったよ」
田口「納得してくれたんじゃなかったのかよ。新しいお母さんが来るってこと」
陽子「納得したよ。したけど、やっぱり嫌だ。

嫌だったの」
田口「ずっと、そんな感じでいるのか」
陽子「自分でもわかんないよ。でも、父さんとあの人たちが仲良くしてるの見てたら、母さんが可哀そうになる」
田口「オマエ…」
陽子「もう17だし、わかってるよ。優香のことだって守らなくちゃいけないことも」
田口「優香、オマエのこと大好きなんだぞ」
陽子「言わないで。うるさい」
田口「陽子」
陽子「父さんは、母さんのこと忘れたの？」
田口「忘れてないよ」
陽子「じゃあ、なんで楽しくできるの？」
田口「楽しいからだよ」
陽子「バカなの？」
田口「だからさっきも言ったろ。俺はバカなんだよ」
陽子「アタシも、バカに産まれればよかった」
田口「俺はさ、打席の中で、全部の球を追い

かけないんだよ。いつも一つの球種しか狙ってないんだ。インコースのツーシームって決めたら、ひたすら、それだけを待ってるんだ」

陽子「何の話？」

田口「みんな、それができないんだ。インコースに投げられたら、アウトコース狙ってたとしてもインコースを意識するし、スプリット投げられたら、高めを狙ってても低めを意識しちまう」

陽子「マジ、意味わかんない」

田口「だから、俺はそういうのができるんだ。よく若手から「怖くないんですか？」って聞かれるんだけどさ、怖くないよ。当たり前なんだ」

陽子「母さんを忘れるのも当たり前なの」

田口「そういう意味じゃないって」

陽子「そういうことじゃん」

田口「違うよ」

陽子「ざけんな」

田口「違う。俺は、いつも思い出してるよ」
陽子「ウソ」
田口「オマエを見る度に、アイツに、ありがとうって言ってるよ」
陽子「アイツ、じゃないし」
田口「ゆかりに」
陽子「私の母さんは、たった一人だから」
田口「いいんだ。ソレで」
陽子「私、高校出たら家出ていくから」
田口「どうして？」
陽子「居心地悪いし」
田口「優香が…」
陽子「優香のことは言わないで」
優香（部屋の外）「優香の話、してるよ」
田口・陽子「あ」
優香（部屋の外）「優香の話、してるもん」
田口「大丈夫だから、入っておいで」

引き戸を開けて入ってくる梨乃と優香。

優香「ねぇねぇ。何の話してたの？」
田口「優香のこと」
優香「優香の何？」
田口「可愛いねって」
優香「やだぁ」
田口「な」
陽子「うん」
梨乃「陽子さん」
陽子「はい」
梨乃「良いんです。ずっと今のままで。陽子さんは何も変わらないでいいんです。陽子さんのお母さんは、ゆかりさんなんですから」
優香「どうして？どうして？ママは、お姉ちゃんのママでしょ？ママがお姉ちゃんのママだよ」
梨乃「いいの。優香」
優香「よくない。よくないよ。ね、お姉ちゃん」
田口「優香。パパのとこおいで」

優香「ママは、お姉ちゃんのママでしょ」
梨乃「違うの。優香。違うの。陽子さんのマ
マは、別のママなの」
優香「ウソだ」
梨乃「ウソじゃないの」

陽子の駆けだす足音。

田口「あ、陽子」

引き戸を開けて部屋を出ていく。

梨乃「陽子さん」
優香「お姉ちゃん」
梨乃「ダメ優香」
優香「なんで？なんで？なんで？」
田口「俺が、行ってくるよ」
梨乃「あなた、立てるの？」

ベッドのスプリングが軋む音。

田口「すまん。やっぱ無理だ」
梨乃「私、行ってきます」
田口「ほっといても大丈夫だろ」
梨乃「あの子に何かあったらどうするの。優香、お願いします」
田口「あぁ。わかった」

梨乃、引き戸を開けて出ていく。

優香「すごーい。ママじゃないみたいみたい」
田口「あぁ。初めてみたな。あんなママ」

遠くで車が駆けぬける音がする。
＊大通りから少し離れた公園。

梨乃「陽子さん」
陽子「来ないで」
梨乃「ごめんなさい。あの人、まだ立てないみたいで」
陽子「一人にして。一人にしてください」

梨乃「でも」
陽子「家出したりしないから。心配させたくないし、父さんのこと」
梨乃「ごめんなさい」
陽子「あなたに謝られる筋合いはないです」
梨乃「えぇ。そうよね」
陽子「母も、母も、死にたくて死んだわけじゃないから。すごく最後は辛そうで、私も父さんも何もしてあげられなくて…ずっと、ずっとそれがあって」
梨乃「陽子さん」
陽子「あなた達のことが嫌いなわけじゃないんです。嫌いなのは自分です。自分のこと。ずっと前に進めない自分のことが嫌い」
梨乃「ごめんなさい」
陽子「謝らないで。関係ないでしょ」
梨乃「そうね。そうよね」
陽子「ほんとは、私なんかいなければ良いと思ってくるくせに」
梨乃「そんなことないとは言えない。やっぱ

り、考えちゃう。３人だったらって。最初から」
陽子「一緒だ」
梨乃「お互いの頭で、消してるんだ。存在」
陽子「そう」
梨乃「優香のことも」
陽子「えぇ」
梨乃「そうよね」
陽子「あの子が、あの子がすごく私のことを好きなこと。それが、今、一番辛い」
梨乃「ありがとう」
陽子「どうして出会っちゃったんだろう」
梨乃「家族だから」
陽子「家族じゃないです」
梨乃「家族になれなくても良い。ほんとは、愛してなくてもいい。それでも」
優香「ママぁ」

優香の駆けてくる足音。

梨乃「優香。一人で来たの」
優香「そうだよ」
梨乃「どうして。危ないじゃないの」
優香「来ちゃったもん」
梨乃「危ない」
優香「大丈夫」
梨乃「大丈夫じゃない」
優香「ちゃんと、横断歩道、手あげたもん。ね。お姉ちゃんに教えてもらったの。ね、お姉ちゃん」
陽子「優香」
優香「お姉ちゃん。何でも教えてくれるんだよ。優香、お姉ちゃんのことだーい好き」
梨乃「ママとどっちが好き？」
優香「お姉ちゃん」
梨乃「どうしてぇ」
優香「だって怒らないもん」
陽子「怒るから優しいんだよ」
優香「怒るのは優しくない」
陽子「大事だから怒るんだよ」

優香「じゃあ、お姉ちゃんも優香のこと怒っ
て」
陽子「怒れないよ」
優香「怒って」
陽子「怒れない」
優香「怒って」
陽子「（泣き出す）」
梨乃「陽子さん」
優香「え？え？お姉ちゃん」
陽子「怒れないよ」
優香「泣かないよ。いー子、いー子」
梨乃「陽子さん」
陽子「ごめんね。優香。ごめん」
梨乃「私こそ、ごめんなさい」
優香「あ、ママも泣いてる。いー子、いー子
してあげる」
梨乃「優香は優しいね」
優香「うん。優香は優しいよ」
陽子・梨乃「ありがとう優香」
優香「どういたしまして」